

優 秀 賞

「 本を読み、学んだ 」

商学科 1 年 渡部 颯太

初めに言っておくが私は難しい本はあまり読まない。

そんな私に、本を1冊読み、内容を要約しろという課題が出された。

私が本を真剣に読んだのなんて小学生の頃、かいけつゾロリに熱中した時以来だ。

とりあえず近所の本屋へ行ってみると、本屋大賞受賞作を集めたコーナーに、読みやすそうな本があり、それを読むことにした。退屈で憂鬱な気持ちを抑えながら課題の為に読んだが、主人公の行動にワクワクさせられ、読了後には「良かった」と思わず口に出してしまうほど心打たれる読書体験ができた。そんな読書熱冷めやまぬ中、ふと世の読書家たちはこの本に対し、どのような感想を綴っているのだろうと気になってきた。

映画を見た後、喫茶店で語り合いたくなる現象と似たようなものだ。評論サイトを覗いてみると、やはり本屋大賞受賞作とだけあり高評価で、1つ1つコメントに共感してしまう。が、その中に少し気になってしまうコメントがあった。「所謂、本を読まない層向け」「良くも悪くもミーハー向け」といったコメントだ。指摘も的についていて確かにと頷いてしまう文章力。そんな文を書ける画面の向こうの誰かは、かなりの読書家に違いないはずだ。つい、私は恥ずかしくなってしまった。自分はコメントに書かれているような、所謂ミーハーなんだと。

その晩、少し考えてみた。その本によって約12年間、封印されてきた私の読書熱が再燃したのだ。その本に少なくとも心を動かされた1人がここにいるのだ。

アニメでもファッションでも所謂流行物は軽視されすぎている気がする。私の考える一例だがアニメなら皆が楽しめる作品、ファッションなら着る人を問わず誰でも様になる服。そんな物もいいじゃないか。好きになった本が読書家たちから評価されずとも、私は最高の本と評価したい。好きなものを好きと言うのは全く恥ずかしい事ではないということだ。そんなことを本を読み、学んだ。